

木島地区に伝わる民話 天神堂にある「天満宮」

～「木島ふるさとかるた」を通しての学習～

飯山市立木島小学校 山崎 哲矢

1 はじめに

昨年度は、『木島ふるさとかるた』（発行 信州教育出版社）を通しての学習から、当時3年生の子どもたちと総合的な学習の時間で、劇団『鬼じま』を立ち上げ、木島地区に伝わる民話、「鬼伝説の『鬼神堂』」の舞台発表を5回行った。その活動の様子や具体的な「民話」の内容について、社会調査委員会で報告させてもらった。

今回は、劇団『鬼じま』で演目を決めるときに、最終候補まで残りながらも、惜しくも落選してしまったもう一つの民話にスポットライトを当てて、報告、紹介させて頂く。

2 『木島ふるさとかるた』



木島地区にある鳥出神社。境内には樹齢千何百年という大ケヤキが枝をはり、かつては県指定天然記念物にも指定されていた。この神社は「鬼神堂」とも呼ばれている。
(昨年度報告した内容)



学問の神様、菅原道真公を祀った天神堂地区にある神社を天満宮という。子どもの好きな神様なので神社の戸は何時も開け放されている。
(今回報告する内容)

3 天神堂地区にある「天満宮」

天満宮を訪れると、一般の常識とは違った様式で建てられていることに直ぐに気づくはずである。お宮は神様を祀るための建物なので、地面に対して高く、もしくは平面に建てられるのが普通であろう。しかし天神堂にある「天満宮」に関しては、門をくぐると、階段を下りるように造られている。なぜなのか。実際にここの「天満宮」は、天神堂のどこの家よりも低いところに建てられているようだ。単にその様な土地の条件からこの様な造りになったのだろうか。

これには、古くから天神堂地区で語り継がれている言い伝えが深く関わっている。



門をくぐると、本堂に向かって階段を下りていく。



慶長12年の千曲川の流路

上記で紹介した『木島ふるさとかるた』には、「天満宮」について「洪水で天神様が何度も流れ着いた場所との言い伝えが残っている。」と、補足説明書きがされている。

これについて、生まれも育ちも天神堂の出身である本校職員に詳しく話を聞いてみた。その話によると、

昔、千曲川の水が増え、この地区が水害に遭ったときに、上田のお宮の天神様（木札）が流れてきた。村人は「これはとても大切なものだ」と、天神様を返しに行った。その後、水害に遭うたびに何度も天神様が同地区に流れついた。そこで「天神様をそこにお移しした方が良さそうだ。」ということになり、流れ着いた場所にお宮を建てた。そして、流れ着いた場所を神聖な場所として、降雨や川が氾濫したときには、そこがわざと水浸しになるように造られた。

この話を聞いて、なぜ階段を下りるような造りにしたのか合点がいった。階段を下りてそのまま進むと社殿があり、その社殿は数段高いところに構えられている。つまり門と社殿の高さが大体同じになっている。そして、境内の周りは石の玉垣がめぐらされているので、天満宮は底の浅い箱のような形状となり、水があふれた際には、わざわざ水浸しになるように造られたのだ。

4 千曲川の氾濫

『木島村誌』によると「飯山盆地の底にあたる木島は、平均して4年に1回くらいの割合で、洪水の難にあっている。木島の人々の昔の生活は、まったく水との戦いの連続であったといっても過言ではない。」と記されている。また、現在の千曲川の

流路は木島地区を沿うように流れているが、昔から流路を変えてきた千曲川は、慶長年間、宝暦年間では、天神堂の天満宮をかすめるように流れていたことが、同じ『木島村誌』の資料からうかがい知ることができる。

このようなことから、実際に上田から天神様が流れ着いたとされる民話は真実味を増し、人々の天神様を大切にする気風が生まれたのではないだろうか。

5 おわりに

『木島ふるさとかるた』には、同じ天神堂地区のことを記した札がもう一種ある。「瞳^めを向いて秋^{しゅう}天^{てん}にらむ洪水の牛」昭和57年9月13日の大洪水で、木島の乳牛二百四頭が溺死した。天神堂の天満宮の境内には、溺死した牛たちの慰霊碑が建てられている。木島地区は深く水と関わり合ってきた歴史がある。防災意識を高めながらも、自然を敬い、上手に付き合っていくことが必要ではないだろうか。

〈参考文献〉

・木島村誌（木島村誌発刊委員会）